

# 福澤研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第33号 2021年1月31日 発行

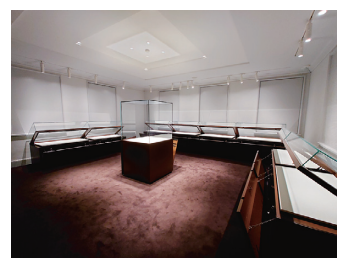
## 目次

|                                            |   |                                      |     |
|--------------------------------------------|---|--------------------------------------|-----|
| * 福澤諭吉記念慶應義塾史展示館 展示の特徴とその意図<br>(都倉武之)..... | 2 | * 新型コロナウイルスと韓国と日本の「独立」<br>(郭今先)..... | 5・6 |
| * 福沢研究センター 図書館旧館に戻る (久我竜二)...              | 3 | * 主な動き.....                          | 7   |
| * 新収資料紹介.....                              | 3 | * センター諸記録 (2020年4月～2020年12月) .....   | 8   |
| * 嶋谷家寄贈資料とその背景 (田中康雄) .....                | 4 |                                      |     |

## 開設準備が進む慶應義塾史展示館

三田キャンパスの慶應義塾図書館旧館の旧大会議室・小会議室が、2021年5月より「福澤諭吉記念慶應義塾史展示館」として一般公開される準備が進んでいる。

この展示館は、2016年の図書館旧館の免震化とともに計画がスタートし、福沢研究センターにおいて準備が進められてきた。当初は2020年7月開館の予定であったが、2019年の大雨災害と新型コロナウイルスによる工事や準備作業の遅延、さらには根本的な人員の不足などにより開設は2021年5月を予定し、現在も連日連夜、準備作業が進められている。(都倉)



開館準備が進む常設展示室(中央)。  
両側の画像は展示室内の各所の様子。  
右側は上より、  
製作途中の模型、人物の関係性などを体験  
できるデジタルコンテンツ、企画展示室。

## 福澤諭吉記念慶應義塾史展示館 展示の特徴とその意図

福澤諭吉記念慶應義塾史展示館  
開設準備室副室長

都 倉 武 之

「福澤諭吉記念慶應義塾史展示館」が開館することについては、すでに前号において横山寛氏が概要を報告した。今回はその中で、本展示館の特徴とその意図、換言すれば「こだわりのポイント」を簡単にご紹介してみたい。

### 1. 間口を広くする

今回心がけたことの第一が、作るからにはできるだけ多くの人に来てもらうようにすることである。筆者は常々観光スポットにしたい、と公言している。そのためには、単に慶應出身者や福澤諭吉に肯定的な評価を与えている人だけが満足する内容であってはならない。慶應外でも通じる言葉遣いとし、そして福澤を丁寧に紹介しつつ、それを敢えて客観視する視点、批判的な眼差しの存在を無視しないことを心がけた。多様な見方の人が、福澤や慶應義塾史に関心を抱き、議論し続けていって欲しい、というのがこの展示館の立ち位置である。説明文も平易になるよう心がけ、小学生高学年でも背伸びをすれば、アウトラインはほぼ理解できる程度にしたつもりである。

また専門的に近現代史や教育史、大学史などを学んでいる人だけが興味を覚える内容とならないよう、経済、芸術、スポーツをはじめ、多様な切り口が福澤・塾史へと繋がるようにした。つまり内容の間口も広くした。

全面的に日英対訳にした点も困難ではあったが重要な試みだと思っている。これについては慶應義塾内のグローバル本部に全面的な協力を得て、困難な翻訳作業に取り組んで頂いている。また商学部ジェフリー・クラシゲさんにも連日の夜を徹した確認作業に参加して頂いた。福澤のテキストや塾史上の特殊な用語の英語化は、今回試訳ともいべきものが少なくないが、これも議論のタネになればと考えている。

### 2. 全体を意識する

内容の多様性・多面性を重視する一方で、それが単にバラバラのエピソードに終始しないように、今回の解説文やキャプションは、全体の一貫した構成を持つことを常に意識した。この種の展示は、切り売り分担で作ることが多く、内容の重複やちぐはぐ感が表面化することがあるが、幸か不幸かちぐはぐになるほどの人手がこのプロジェクトにはなかった。従って、来場者は、オープニングから、末尾まで、一貫したストーリーをたどっていくことができるはずである。

そして、それをナビゲートしてくれるのが「一筆書きのライン」である。歴史の連続性を意識してもらう仕掛けとして、はじめから終わりまで1本のラインで繋がるデザインとなっているのだ。その最末尾は明確に途切れており、そこから先は来場者個人が自らの判断で書き継ぐもの、という暗喩となっている。これは言葉では説明しにくいので、ぜひ御来館の上でお確かめ頂きたい。

### 3. 本当に面白いのか

この種の展示施設は、冒頭は歴史展示のようでも、大部分が大学の宣伝ということが少なくない。歴史を見て来て興醒めという施設にしないよう、歴史好きに面白がってもらう内容に徹した。内輪の歴史ではなく、日本史的（大きく出れば世界史的）意義から語る姿勢を持った。「社中」とか「三田会」といった、時に強烈なアレルギー反応を引き起こすテーマも存在する。それらについてもジクジクした内輪ウケのニオイを抜き、歴史的関心が醒めないよう腐心しつつ、扱うことにした。もちろんこの種の説明は回避することもできたが、慶應と名がつけば何でも万歳という、ある種の「惑溺」に陥った見方に、歴史的視座を獲得してもらうことを願って、敢えて展示に取り込んでみたものである。

また、クロウト目に杜撰と思われぬようディテールにもこだわった。模型の作り込みは調査員白石大輝氏の血の出るような努力の結晶である。デジタルコンテンツの内容にも相当手が掛かっており、一例を挙げれば戦争期の展示に位置するデジタルコンテンツ端末には慶應義塾出身の戦没者データベースを搭載している。これは白井厚名誉教授調査による名簿を基礎に、それを徹底的に再整理して、戦没場所や戦闘などから検索できるようにしたもので、例えばアッツ島で、例えばレイテ沖海戦で、誰がいつ亡くなったかを検索することができ、その具体性から戦争の実相を感じてもらえるようにした。

このように、展示の様々な角度から強い意図を持って製作した。福澤や慶應義塾に対して一般的に持たれているイメージを敢えて壊し、その本質を来場者がつかむことを狙ったつもりだが、果たしてその意図がうまく伝わるか、ぜひご来館の上、ご批評頂きたい。

最後に、当センターは従来の事業に加えてこの事業を持続していくにはあまりに脆弱な現状である。オープンに当たっての労力は尋常なものではなかった（まだ終わっていない）。読者諸氏にはぜひ引き続きご関心をお寄せ頂き、ご支援賜れば幸いである。

## 福沢研究センター 図書館旧館に戻る

福沢研究センター事務長 久 我 竜 二

2020年9月14日(月)から17日(木)の4日間かけて、当センターは南館4階、7階、9階および東館2階の仮住まいから、図書館旧館1階、地下1階に戻った。2015年12月21日に引越を開始してから4年9か月ぶりである。

これは図書館旧館の耐震強度不足による免震工事によるもので、重要文化財である図書館旧館は国の補助と管理の元、長く工事することとなった。

当初は2020年4月ごろに戻ることを予定していたが、新型コロナウイルスによる学校閉鎖や各種工事の遅れなどが発生、また引越準備・整理の人手不足などもあって何度か延長され、秋学期より学生が授業で入構できることも考慮して、その直前に実行することとした。

専任職員も在宅勤務があり、調査員はほとんど出勤がない中、何とか準備を進めたが、直前1か月になって異常なまでの高温多湿の天候により、東館2階書庫の本の全体にカビが発生していること、書庫の集密書架の鉄部が大きく錆びていることがわかった。5,000冊以上の本を埼玉福祉会に依頼してアルコールで除去作業を行い、錆は見えている部分は錆び取り機を用務員室から借り出して何人もの人たちで研磨したり拭いたりして対応した。

SBS ロジコムに依頼した4日間の作業は、センター所属の教職員の団結の元ほぼ予定通りに進んだが、最終日17日、書庫へ本を納入するにあたり、できるだけ例外的な配架をしないよう、まちまち本のサイズに合わせて棚を1段ずつ調整する事態が発生し、時間をオーバー

して何とか引越を完了した。

戻った旧図書館は内装はきれいになった。旧館に入ってすぐ左手のセンター入口から入った空間は事務室で、カーペット敷きの低めのOA床となった。その奥の左手は大きな集密書架のある南書庫であったが、その集密書架は撤去して白い壁の共同研究室となった。右手は収蔵庫前の仕切りで区切った小部屋が二つあったが、仕切りを取り外し広めの収蔵室一部屋となった。共同研究室も収蔵室も冷暖房完備だが、配管が天井に取り付けられ、天井が低くて背高のキャビネットや棚が入らないという難点があり、引越の際の家具配置には難渋した。建物に入ってすぐ右手の旧展示室やその奥の八角塔はカフェとなる予定とのことで当センターの管轄を離れた。

地下1階階段脇の分室と言われていた書庫は、可動式書架を増設して名称も書庫とした。また、旧民族考古学展示室だったところには、左右に集密書架と集密棚を配置した塾史資料室1、旧HUMIの部屋だったところには塾史資料室2, 3, 4を配置し、前ページの塾史展示室の研究、保管、閲覧スペースとすることになった。

2階の旧大会議室、小会議室であったところには、それぞれ塾史展示館の常設展示室、企画展示室となり、来年度のオープンに向けて準備中である。

なお、4月に開設した小幡篤次郎著作集刊行事業室は西館2階のままである。

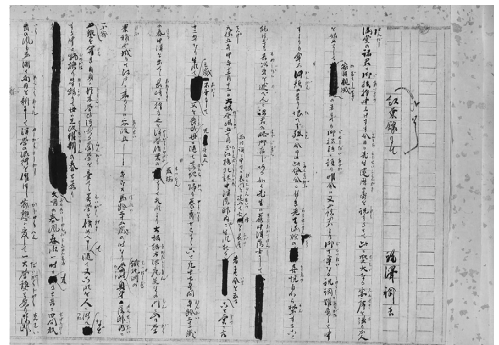
## 新収資料紹介

### ■ 時事新報社説原稿「紅葉館にて」 1巻

【寄託】

今回光吉将郎氏より寄託を受けた時事新報社説原稿は、福沢諭吉が還暦の祝宴の際に行った演説を『時事新報』に社説として掲載した際のもので、初稿および加除訂正部分のすべてが、福沢諭吉による自筆である。

天保5年甲午生まれの福沢は、明治27年に還暦を迎えたが、折しも日清戦争が行われており、祝宴は延期となった。改めて明治28年12月12日(旧暦の誕生日)に、学生たちによる「祝寿会」が慶應義塾講堂中庭で行われ、小幡篤次郎を発起人総代とした祝宴が芝紅葉館で行われた。この原稿は演説の際に準備したそのままではなく、文体や文字の大きさなどから、社説用に手を入れたものと考えられる。(西沢)





## 鳴谷家寄贈資料とその背景

### — 慶應義塾医学所の卒業生と大学設置寄付金関連資料 —

福沢研究センター客員所員  
(元群馬県立文書館長)

田 中 康 雄

#### 1 資料の概要

##### (1) 井出禮二(郎) 医学修行履歴書

明治10年3月14日付、井出禮二郎差出、徴兵署あて(3月22日付徴兵免役聞届御指令奥書)。

##### (2) 医学書

Henry Gray, T. Holmes, *Anatomy Descriptive and Surgical*; 5th ed. (1870)

John C Dalton, *A Treatise on Human Physiology*; 6th ed. (1875)

Robley Dunglison, Richard J. Dunglison, *A Dictionary of Medical Science; enlarged and rev. ed.* (1874)

T. Henry Green, *An Introduction to Pathology and Morbid Anatomy*; 2nd American form the 3rd rev. and enlarged English ed. (1876)

Austin, Flint, *A Treatise of the Principles and Practice of Medicine*; 4th ed. (1873)

Druitt, Robert, *The principles and practice of modern surgery; new and rev. American from the 8th enlarged and improved London ed.* (1867)

##### (3) 慶應義塾大学設置寄付金関係資料

- ・感謝状：明治23年12月15日付、塾長小幡篤次郎・社頭福沢諭吉連名発行。鳴谷一元(寄付者)あて。紙面の中央上部にペンと劔の交叉マークを配す。
- ・記念章メダル：直径6cm、厚さ1.7cm。表面銘文「慶應義塾、大學設立、記念章」。裏面レリーフは感謝状と同様のマーク、紀年銘「明治廿三年一月十日」。ケースが附属、但し破損。感謝状とセット品。

#### 2 受入経過

上記(1)(2)は平成8年1月、鳴谷亮一氏(平成元年歿、東京大学医学部卒、群馬大学医学部・東海大学教授、国立横浜病院院長)の夫人鳴谷昌氏からの寄贈。

(3)は令和2年2月、群馬県前橋市在住医師永島勇氏の寄贈。鳴谷昌氏没後にその遺品整理にかかわられた際、同氏が譲り受けて保管していたもの。

#### 3 鳴谷家と関連資料

鳴谷家は戦国期に今川氏勢力下の駿河国に来住、5代目のとき郷土となり医術を甲斐国の徳本に学び、代々業とした。江戸幕末期の鳴谷一元(14代)は、兵太夫新田(現藤枝市内)の村松良元に医科修業、田中藩の御典医でもあったと伝えられる。この一元は明治9年に隠居別家し、自らは代々定住の子持坂村(現藤枝市内)から近隣の横内村へ転居、医業を継続した。この後、14代一元＝一元＝元熙＝亮一と継嗣され、静岡、東京へと転居した。上記資料は、鳴谷亮一氏のもとに伝存した記録・文書類の一部である。なお現在、残余の資料も伝えられている。

一方、旧子持坂村で家系を継いだ鳴谷家には別の記録・文書も家蔵されており(静岡県史編さん資料調査)、その一部かとみられる筆写資料が藤枝市立岡部図書館に架蔵されている。

#### 4 資料の背景

上記1(1)の差出人井出禮二郎(他資料では「禮二」と1(3)名宛人の鳴谷一元は同一人物。高柳下村(現藤枝市)の医家井出玄通の二男で、14代鳴谷一元の養子となり(明治12年頃か)、のち一元を襲名した。玄通も田中藩の御典医であったという。この履歴書によれば、明治6年4月から近藤良薫に師事、8年1月に慶應義塾医学所に入学して修学、「医学所入社帳」にも記録されている。

1(2)は一元(井出禮二)の医学書と伝えられる。

1(3)は慶應義塾医学所卒業の所縁により大学設置募金に応じた際のものであろう。

鳴谷一元の医師としての事跡は『日本博覧図静岡県初編・後篇』(復刻版『静岡県明治銅版画風景集』平成3)に画かれた明治25年頃の広大な邸宅・病院建物の外観によって想像することはできるが、医業実態を知る手がかりは関連資料中に殆どない。しかし地元の学校医をはじめ、志太(郡)医師会では三十数年にわたって、会の発起人、理事、会長、評議員、県医師会議員等の役職を歴任して、地域医療に貢献していることがうかがえる(『志太医師会史』昭和57)。

1(1)は元来徴兵免除を申請した際の書類である。明治6年に公布された徴兵令下、医学所における修学が免除条項にある「医術馬医術ヲ学ブ者」に該当するとして「聞届」られたものと解される。一方で、医師としては「医術開業試験」を受験・合格した者として医師会員となっていることがうかがわれる(前掲医師会史)。

鳴谷一元(井出禮二)をめぐるのは、漢方村医、慶應義塾医学所、徴兵制、明治医制、地域医療等の背景が展望される。徴兵制への対応という面で見れば、私学・慶應義塾の大学部設置(寄付金)も背景を共有しているともいえる。

他の関連資料には、土地売買・管理・小作・相続登記等の記録・文書が多く見られ、医家として別の側面も想定される。別途考察の余地はあろう。

以上、少数の資料であるが背景は広く、それらを繋ぐヒントとして、『鳴谷亮一先生を偲んで』(鳴谷亮一先生追悼誌編集委員会、平成2)に寄せられた鳴谷昌氏の回想文がある。鳴谷一元の横顔を垣間見る事ができる貴重な情報である。同書には1(1)の図版が掲載されている。

これら資料の保存価値を認識し、慶應義塾へ託された寄贈者のご意思をここに銘記しておきたい。



## 新型コロナウイルスと韓国と日本の「独立」

高麗大学韓国史学科 郭 今 先

筆者は高麗大学校韓国史学科で近代政治思想史を専攻している。具体的には1876年から1910年までのいわゆる「開港期」に関心を持っており、その理由は当該期に規定された「近代」が、現在の韓国社会にも大きな影響を及ぼしていると考えからである。この時代の近代思想の受容に関しては、日本との関係が重要であり、その中でも福沢諭吉研究の比重は少なくない。そのため、以前より福沢への関心を持っていた中、「高麗大学 BK21+韓国史学未来人材事業団」の支援を受け、2019年9月から1年間慶應義塾福沢研究センターにおいて准訪問研究員として滞在する機会を得た。1年間の日本滞在中には多くの事があったが、一番の大きな事件は半年以上を支配してしまったコロナ19ウイルス（以下コロナ）だった。

コロナの深刻性が報じられ始めたのは、2020年1月中旬頃であった。その後、コロナに関する情報が世間に広まっていったが、2月初めに横浜に停泊中だったクルーズで感染者が発生したという記事に接するまでは、まだ自分にとっては「他人事」だった。韓国では2月末、大邱で「新天地教会」を中心に感染者が急激に増え始め、3月になると韓日両国の国境が閉ざされるようになった。日本でも次第に感染者が増え、全国の博物館や図書館が休館し始めた。3月末には東京オリンピックの延期が決まり、それから間もない4月中旬に非常事態が宣言された。

韓国にとって、日本は地震や台風など災害への備えが徹底している国として知られている。以前、観光客として日本を旅行する時は知らなかったが、災害時に緊急放送が正しく流れるか確認するために、毎日午後決まった時間になると音楽が流れるのも、やはり日本なんだなと思わせた。日本で生活して間もない、2019年10月、台風19号「ハギビス」が日本を襲い、大きな被害を与えたことがあった。これほど大きな規模の台風を経験したのは生まれて初めてだったが、そのような災害に適切に対応していく姿を見て、日本だからこそそれぐらいの被害にとどまったのではないかと思った。

ただ、ややなじみがなかったのは、食材などを買いだめする様子だった。幼い頃、北朝鮮との戦争危機が高まったりする時、韓国でも買いだめをする姿をニュースで見たことはある。しかし、最近は災害と関連して食料品、生活用品などを買いだめすることは韓国ではない。それでも「ハギビス」の時は、台風で電気や水道などが

途切れるかもしれないという理由で、日本人が当たり前の対応をしているのだらうと思った。スーパーマーケットの商品棚が空っぽになっていくのを見て、私も急いで食料品を買うために、いくつものスーパーマーケットを回った。

そして今年、コロナという新しい災害に直面した。コロナが日本社会で深刻な危険と認識された正確な時点は特定が難しいが、概ね五輪延期が確定し、東京都知事が週末外出の自制を勧告した頃であったようだ。3月初めからすでにトイレットペーパーがスーパー等で見かけにくくなり、3月末に休校方針が決まると、「ハギビス」の時のような食料品の買いだめが始まった。ただ、この時の買占めは「ハギビス」の時とは多少異なる感想を持った。言い換えれば、このような危機的状況で日本政府は一体何をしているのかという疑問を抱いたからだ。

食料品の買いだめは、日本だけではなく、封鎖措置が下された欧州の国々やオーストラリアなどでも目にすることができた。韓国では、初期にマスクを買いだめすることはあったが、その他の物品については、そのようなことはなかったという。そのため韓国人の中には、これを立派な国民性のおかげだと自負する人もいたという。

このように買いだめに言及する理由は、最初は理解できなかったが、今は買いだめが必ずしも問題の行動ではないと考えるからである。つまり日本人は自らの安全のために、基本的には国の指示を履行しながらも、結局自分の安全は自分で守るべきであると考えから、そのような行動をしたのではないだろうか。文章を書いている今も日本政府の対処は不十分であり、またこれまでもおかしかったと思っているが、それにもかかわらず、それぞれの日本人は災害の状況で「私」と「私の家族」を守ることは、「国家」や「他人」に完全に委ねることはできないという考えで、自らを規律したと思う。非常事態宣言当時、日本政府の対策は移動を制限はしたが、あくまでも強制力の弱い勧告程度であった。日本人は政府の対策に疑問を持ちながらも、そのような勧告を考えた以上によく守り、夕方の商店街は非常に静かだった記憶がある。台風の時に食料品の買いだめをおかしいと思ったのと似たような感じを、その時も受けたように思う。

一方、韓国人が買いだめに乗り出さなかったのは、災害時に国民の安全を守るべきは、あくまで「国家」でな

らなければならないと考えるからである。マスクも食料品も、「国家」が「国民」のために準備しなければならない。韓国人は自分たちの安全（生命保障）と国家の責任を強く結び付ける。2008年の米国産牛肉の狂牛病に対する恐怖は、人をデモに駆り立て、朴槿恵が政権を握っている間にあった、マーズ（MERS）コロナウイルスに対する不十分な対処、そしてセウォル号の犠牲者に対する国家レベルの無視などは、政権の存在自体を脅かすものだった。これを目撃していた文在寅政権は、今回のコロナで国民の安全を強調し、いわゆる「K-防疫」という成果を作り出すことができたと考える。

近代国家において国民の安全を保障することは、国家が持つべき非常に大きな責務の一つに違いない。しかし現在の韓国社会では、それが行き過ぎるほど最優先の価値になっているのではないかとと思われる。このため、韓国人は自分の安全のために国家によって行われるプライバシーの侵害も、経済的な損害も甘受する。実際に今回韓国に戻ってきて、個人に対する過度な制裁が加えられているのではないかという気がしたが、自由という人間の基本権に対する問題提起は、「国民の安全」という大前提の下で、議論さえ慎重にならざるを得ないのが現在の韓国の状況である。

日吉駅に降りて慶應義塾大学日吉キャンパスに入ると、すぐ左手に独立館が見える。「独立」という単語は、修士論文で「独立協会」をテーマにしたこともあり、また、韓国での「独立」が持つ意味もあったので、その名前がかなり奇異に感じられた。「独立」という言葉に感じる不慣れな感じは、慶應義塾が福沢諭吉を「読解」する方法をある程度理解するとなくなった。つまり近代人として個人の重要性を強調すること、結局「私」が自らを守れる経済的力量、学問的力量、政治的力量などを育てて個人が「独立」することが、慶應義塾が福沢を理解する方式だったようである。このような「独立」の概念は日本社会全般にも根付いているようである。つまり日本における独立の主体は個人であり、近代的主体として個人の発見が何より重要であると考えられる流れがあるようだ。

一方、「独立」は韓国でも重要な概念であるが、日本とは異なり民族の神話を叙述するために使われてきた。例えば、韓国人が民族の独立のために、どれほど犠牲になってきたかを教えることが、韓国史教育の重要なテーマである。このような教育を受けて韓国人は民族の安全のために自分たちが義理を尽くしただけに、危機的状況下で国が自分たちのために努力することを要求するのではないかと思う。ここで思わぬ問題が発生する。国が安

全を保障しなければならないのは、そのような犠牲の叙事で縛られた非常に狭い範囲の国民だけが該当するということだ。韓国でもコロナによる補助金が支給された。ところが、その補助金は韓国に居住する外国人には支給されなかった。これを批判するマスコミもあったが、一般的な情緒は、あくまで「国民」だけがそのような支援を受けるのでなければならないというところにあったようだ。こうした側面から考えると、「K-防疫」は「住民登録」という独裁時代の遺産が作り出した「国民」にのみ、有効なのかもしれない。

とりとめのない文章になってしまったが、この文はコロナに対応する両国の方式に対する是非を問うものではない。実際、日本と韓国のコロナ対策の両方を経験した結果、正解はないと考えている。この文で話そうとしたことは、コロナという災害に対応する人々の姿を見て、以前は似ていると思っていた日韓両国の考えの違いが大きいと思い、そのような差を両国の独立に対する態度から読み解いてみたかったのである。

\*\*\*\*\*

#### 『漢城新報』に現れる儒教的概念の含意

7月10日にzoomを利用して、郭今先氏の研究報告会を行った。zoomによるワークショップは、福沢研究センターとして初めての試みであったが、14名の参加者を得、北海道や鹿児島からも参加していただき、活発な質疑応答を行うことができた。

郭氏の報告は、朝鮮内の反日世論を抑えるために、日本外務省が費用を負担して漢城（ソウル）地域を読者対象として1895年に創刊した『漢城新報』を題材に、1897年2月までの間の記事の中から、儒教的概念が現れた事例を分析し、①「文明開化」という西洋の概念を朝鮮の読者に宣伝する、② 儒教的日常道徳を強調するという2つの脈絡の存在を明らかにした。

『漢城新報』は朝鮮で初めて「文明開化」を宣伝した新聞で、論調は儒教に批判的と考えられるが、しかし孝、貞節といった儒教的概念が繰り返し登場し、それらは日常的道徳概念に結び付いていた。郭氏は同紙の記事が、急激な時代の転換期において、新しい道徳概念を「東洋」が共感できる形で伝えようとしていると考えられることを指摘した。質問は、『漢城新報』にみられる道徳の性格付けや、在朝鮮日本人たちとの関わり、音読などについてで、資料的制約も多い中で今後の郭氏の研究に期待が寄せられた。



## 主な動き

### ■ 小幡篤次郎著作集編集刊行事業

福沢諭吉協会の協力のもと、4月に住田孝太郎君が着任し、本事業が開始された。

事業室は三田キャンパス西館2階に置き、編集作業室としての関連著作集や機器備品などを揃えつつある。新型コロナウイルスの影響で国会図書館など実際に資料を閲覧に行くことができず、底本確定作業は遅れているが、ネットによるデジタル資料の調査や刊行に必要なデジタルデータの作成、年譜の作成など進めている。

昨年度に続き、9月29日に本年度第1回の刊行委員会が開催され、10月2日には初の編集委員会が開催された。11月13日には第2回編集委員会が開催され、具体的な刊行に向けて各委員間の意見交換が行われた。

11月中旬から12月にかけて中津市で現地調査を行った。

### ■ 新型コロナウイルス関連の体制

新型コロナウイルスのため、4月7日から5月31日まで出勤を全面的に控えることとなり、センターは閉室、在宅勤務となった。その後も5割から7割程度の出勤となり、出勤と在宅勤務を交えての運営となっている。

設置講座については、春学期、秋学期ともすべての授業がオンデマンドなどリモート授業で行われた。

### ■ ワークショップ

7月10日郭今先君（高麗大学大学院 福沢研究センター 准訪問研究員）のzoomによるワークショップが行われた。詳細は本誌 p.6 を参照。



10月2日小幡刊行事業の編集委員会の後、住田孝太郎君により「福沢諭吉と小幡篤次郎著作集の言論戦略のはじまり—『訓蒙窮理図解』『天変地異』『博物新編補遺』における伝統の持続と新しさについて—」と題するワークショップがzoomで2時間にわたって行われた。14人の参加があり、報告の後、活発な質疑応答や意見交換がされた。



### ■ 中津市アーカイブズ講座（中級）

8月27日「福沢諭吉と中津」と題して、西沢直子君によるリモートでの講座が開かれた。

なお、新型コロナウイルスのため学生・生徒の参加による講座は中止となった。

### ■ 新中津市学校市民講座

「著作から見る福澤思想」というタイトルの下、第1回は、9月5日「学問のすゝめ」について、米山光儀君によるリモートでの講座が開催された。10月17日には、「子供向け読物」と題して山内慶太君により第2回が対面で開催され、第3回は、12月12日に都倉武之君により「時事新報社説」についての講演会が対面で開催された。参加者は第1回47名、第2回37名、第3回40名であった。

### ■ 令和2年度中津市歴史博物館・新中津市学校・福沢旧邸保存会合同企画「福沢諭吉の書」

11月14日から2021年1月9日まで、開催の企画展に当センターは「後援」として参加し、「明治政府の出仕命令を辞する願書」や書簡・自筆原稿・文具など22点を貸し出した。

## ■ 諸会議

- \*2020年度執行委員会（7月9日、8月28日、10月28日）
- \*2020年度運営委員会（7月16日、11月10日）
- \*『近代日本研究』第37巻編集委員会（8月25日、9月24日）
- \*2020年度小幡著作集第1回刊行委員会（9月29日）
- \*2020年度小幡著作集編集委員会（10月2日、11月13日）
- \*『慶應義塾150年史資料集』第3巻編集委員会（10月22日）
- \*2020年度第1回福沢研究センター会議（12月22日）

## ■ 人事

|                       |    |               |              |
|-----------------------|----|---------------|--------------|
| ＜所 長＞                 | 重任 | 井奥成彦（文学部）     | 10月1日～       |
| ＜副 所 長＞               | 重任 | 平野隆（商学部）      | 10月1日～       |
|                       | 重任 | 西沢直子          | 10月1日～       |
| ＜所 員＞                 | 新任 | 朝倉浩一（理工学部）    | 4月1日～        |
| ＜専任所員＞                | 新任 | 住田孝太郎（特任助教）   | 4月1日～        |
| ＜訪問准教授＞               | 新任 | 石井寿美世         | 4月1日～        |
| ＜客員所員＞                | 新任 | 宮内環           | 4月1日～        |
| ＜研究嘱託＞                | 新任 | 具知會           | 4月1日～        |
| ＜事 務 局＞               | 新任 | 横山寛（事務嘱託）     | 4月1日～        |
|                       | 退職 | 加藤学陽（非常勤事務嘱託） | ～4月30日（期間満了） |
|                       | 退職 | 具知會（非常勤事務嘱託）  | ～4月30日（期間満了） |
|                       | 新任 | 柄越祥子（非常勤事務嘱託） | 5月1日～        |
|                       | 新任 | 宮脇麻里（非常勤事務嘱託） | 5月1日～        |
|                       | 退職 | 岩田有紀子（派遣職員）   | ～6月19日       |
|                       | 新任 | 奥山美樹（派遣職員）    | 6月22日～       |
|                       | 新任 | 内田金蔵（主務）      | 7月1日～        |
|                       | 新任 | 飯島典子（事務員）     | 7月1日～        |
|                       | 退職 | 高田真規子（事務嘱託）   | ～7月10日       |
| ＜福澤諭吉記念慶應義塾史展示館開設準備室＞ |    |               |              |
|                       | 新任 | 都倉武之（副室長）     | 7月1日～        |
|                       | 新任 | 久我竜二（室員）      | 7月1日～        |
|                       | 新任 | 横山寛（室員）       | 7月1日～        |
|                       | 新任 | 白石大輝（室員）      | 7月1日～        |
|                       | 新任 | 中村亮（室員）       | 7月1日～        |

## ■ 主な来往

- \*静岡県小山町溝口氏・金子氏、資料返却のため来訪（7月22日）
- \*野球殿堂博物館へ資料貸出・返却（7月28日、8月27日、12月10日）
- \*渡洋二郎氏来訪（10月16日）
- \*中津市教育委員会松岡李奈氏・三谷紘平氏、資料集荷のため来訪（11月4日）
- \*中津市教育委員会教育長栗田英代氏来訪（11月6日）

## ■ 取材対応

- \*共同通信対応（5月8日）
- \*5月20日放送、NHK「歴史秘話ヒストリア 福沢諭吉センセイのすすめ」(2019年12月12日、2020年1月21日、2月3～4日、3月26日取材対応)
- \*毎日新聞対応（6月4日）
- \*NHK「週刊まるわかりニュース」対応（6月21日）
- \*世界文化社『家庭画報』『福沢諭吉のすすめ』10月号対応（7月2日）
- \*読売新聞対応（8月9日）
- \*フジテレビ「日曜報道 THE PRIME」対応（8月13日）
- \*塾生新聞対応（9月16、23日）
- \*朝日新聞対応（10月5日、11月11日）
- \*11月14日放送、テレビ東京「出沒！ アド街ック天国～頑張

れ学生街！青春メシのある街」(10月26日取材対応)

- \*慶應高校日吉祭実行委員会対応（12月7日）
- \*大分合同新聞取材対応（12月13日）
- \*12月28日放送、BSテレビ東京「明治の三賢人」(11月25日、12月9日取材対応)

## ■ 出張・見学

- \*都倉、山辺昌彦氏講義収録のため、本郷・わだつみのこえ記念館訪問（10月15日）
- \*中津市にて小幡篤次郎版本調査（住田11月16～18日・30日～12月4日、西沢12月3～6日）
- \*西沢、東書文庫訪問（12月17、24日）

## ■ 講師派遣

- \*都倉、信濃町研修医・専修医の新任者オリエンテーションで講義：「慶應義塾と福沢諭吉、北里柴三郎」(4月1日)
- \*西沢、アーカイブズ講座授業：「福沢諭吉と中津」(8月27日)
- \*都倉、長野三田会講演：『学問のすゝめ』の読み方」(9月19日)
- \*都倉、船橋三田会講演：「北里柴三郎と福沢諭吉」(10月18日)
- \*西沢、東京三田倶楽部セミナー：『女性論・家族論』(10月23日)、『近代社会構想と衛生観』(11月25日)
- \*都倉、慶應義塾全国議員連盟講演：「災害と福沢諭吉」(11月6日)
- \*西沢、全国高等学校論文大会審査員（中津市）(12月3～4日)
- \*都倉、東京芸術大学コンサート・シンポジウム「戦争の時代の芸術」報告（12月6日）
- \*都倉、新中津市学校市民講座：「時事新報社説」(12月12日)
- \*都倉、中津市歴史博物館・福沢記念館でギャラリートーク：企画展「福沢諭吉の書」展示解説（12月12・13日）
- \*都倉、第121回日本医史学会学術大会（オンライン）（大会実行委員）福沢研究センター後援（12月19～28日）

## ■ その他

- \*都倉、塾史展示館業者との打合せ（4月6、8、15、30日、5月15、19、21、25、27、28、29日、6月1、4、8、9、10、12、16、18、19、22、24、26日、7月1、8、10、15、17、22、29、31日、8月12、14、25、26日、9月1、9、16、23、28、29日、10月2、7、9、16、23、26、30日、11月5、13、18、26、30日、12月3、15、21、25日）
- \*都倉、港区史監修者会議（5月29日、7月13日、10月5日）
- \*西沢、地域連携室運営委員会（6月3日）
- \*都倉、港区史会議（6月23日、7月13日、8月28日、10月15日）
- \*都倉、KeMCo 連携展会議（6月23日、8月19日、10月13日）
- \*都倉、三田メディア協議会（6月24日）
- \*准訪問研究員郭今先氏、研究報告会（7月10日）
- \*都倉、美術品管理運用委員会（7月15日、12月7日）
- \*西沢、国際センター会議（5月21日、7月22日、10月29日、12月14日）
- \*都倉、港区文化財保護審議会（8月5日、12月14日）
- \*展示館開設準備室会議（9月28日）
- \*小幡篤次郎研究報告会（10月2日）
- \*西沢、都倉、KeMCo 運営委員会（11月19日）
- \*都倉、上原家目録打ち合わせ（11月25日、12月23日）

[前号(第32号)の補遺]

## ■ 講師派遣

- \*都倉、新中津市学校・1万円札肖像35周年記念講演会で講演「福沢諭吉と小泉信三 ―『帝室論』と象徴天皇制」(2019年10月20日)

## 慶應義塾福沢研究センター通信 第33号

Newsletter of  
Fukuzawa Memorial Center for  
Modern Japanese Studies,  
Keio University

発行日 2021年1月31日（年2回刊）  
編 集 慶應義塾福沢研究センター  
発 行  
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45  
電 話 03-5427-1604  
http://www.fmc.keio.ac.jp/  
印 刷 (有)梅沢印刷所